

# てんびんガイド だより



近江八幡観光ボランティア  
ガイド協会 広報宣伝部発行  
お問合せ  
近江八幡駅  
北口観光案内所  
0748-33-6061  
協会:HP/QR



## 「新年にあたって」

近江八幡観光ボランティアガイド協会

会長 青木 紀夫

2026年の干支は、午の年です。一般的に知られているのは、十二支の「午（うま）」ですが、より正確には60年に一度の「丙午（ひのえうま）」とされています。「躍動・成功・勝負運」を象徴する干支と言われています。また、午は「人の役に立つ」「家族を守る」「幸せを運ぶ」縁起の良い存在とされています。まっすぐに前に進む力強さから「事業が発展する年」「努力が実を結ぶ年」とも言われています。

私自身も、午の年に肖り何事に対しても「うまく（上手に）いくように」「前向きに進む」生き方・考え方を取り入れていきたいと思えます。併せて、皆様にとりましても良い一年になりますようにお祈りいたしております。

さて、今年の当協会事業関係につきまして、ご紹介させていただきます。

第1に、かねてから課題点になっていましたガイド経費（ガイド交通費を含む）の見直しを、昨年4月から実施させていただき順調に進んでいます。3時間までのガイド費→1,500円；3時間を超えるガイド費→2,500円として、値上げ分を協会運営費に充当して、今まで以上に、組織の充実を図っていきたく思っています。併せて、お客様から「八幡へ来てガイドをお願いして良かった」と思っていただけのように「おもてなしの心」を持ったガイドができるように、日々研鑽をしています。

第2には、「令和8年度近江八幡市観光ボランティアガイド協会総会」予定日のご案内です。

4月11日（土）午前10時から「八幡支部総会」；4月27日（月）午前10時30分から「通常総会」を「市文化会館小ホール」で予定していますので、ご出席下さいますようよろしくお祈りいたします。

第3には、「当日ガイド活動の実施」について、広報面でも活用してPRに努めていき、ガイド数の増加を図りたいと思っています。また、会員が高齢化になってきていますので、「入会していただく機会や、その講座内容の見直し・充実」をしていきたいと思っています。

第4には、前年度同様の ①観光ガイド事業（通常ガイド；タイトルガイド；協力・支援・受託ガイド；ガイドスキル向上事業；ガイド心得など）②研修事業（新入会員のための研修；ガイド現地研修；ふるさと観光塾；先進地研修など）③運営事業 ④広報宣伝事業 ⑤紙芝居部事業 ⑥会務関係事業（総会；役員会；全体会；各部会；協会ホームページ及び、ガイド申込システム〔サークルスクエア〕の運用・管理など）を柱に実施していきたいと考えていますので、皆様方より一層のご指導と、ご鞭撻をよろしくお祈りいたします。

末筆になりましたが、賛助会員の皆様には、私たちの活動に対して、日頃からひとかたならぬご支援、ご鞭撻を賜りまして誠に有り難うございます。

今年も引き続きよろしくお祈り致します。





## ヴォーリズ建築を巡る 韓国祈りの旅に参加して 坂井 繁

ヴォーリズ来日120年記念事業として昨年11月11日(火)から14日(金)の4日間の祈りの旅に22名で参加致しました。

初日は仁川空港から約5時間掛けて韓国4番目の都市大邱市(テグ)にて宿泊致しました。大邱市には7件あったヴォーリズ建築が現在は1件のみ現存しております啓聖(ケソン)中学校に翌日訪れました。朝鮮半島で初めてのカレッジ・ゴシック様式による建物で大邱市の有形文化財に指定されております。次に案東(アンドン)にある1909年に建築された長老派の安東教会を訪れました。一万個を超える花崗岩を積み上げた教会堂で2015年韓国の登録文化財に指定されており、朝鮮戦争時の今尚残る弾痕の傷跡は痛ましい思いでした。三日目は、朝鮮戦争後の休戦ラインに近い鉄原(チョルウォン)第一メソジスト教会は1937年に建てられ地下1階、地上3階の大きな教会でした。朝鮮戦争時には地下で多くの方が虐殺され、その後国連軍により破壊され戦争の残酷さと南北分散という空しさを語りかけております。最終日はソウルの梨花女子大学1886年設立された韓国初の総合女子大学で鮮やかな紅葉の下でのキャンパスは目を見張る思いでした。最後に訪れた延世大学は1885年に設立され学生数2万5千人を要する大規模大学でヴォーリズ建築としては食堂「韓慶館(ハンギョンクァ)」が1940年建築され、上から見ると十字架の形をしていました。朝鮮半島でのヴォーリズ建築は149余りと言われておりますが、そのほとんどが教会堂や学校ですが、日本の植民地下での苦難や朝鮮戦争により破壊され又それ以後建て替え等で減少されている現状を残念な思いで韓国を後に致しました。

啓望中学校 本館



安東教会堂



延世大学 韓慶館



梨花女子大学 本館



## ふるさと観光塾 開催

## 「近江八幡」の“魅力”と“良さ”を再発見する！



令和7年度「ふるさと観光塾」を1月24日から2月21日までの毎土曜日の全5回で行いました。広報宣伝部や事務局のご尽力により、24人が参加され、明るい楽しく学べる塾になったと思います。今年は毎回「実地研修」を用意し、その実地研修に関連する内容を座学講師の方にもご理解いただき座学講義内容に含んでいただきました。八幡の地域産業も今回取り上げました。観光物産協会の田中さんによる「はちまん新商品見て歩き」もとても好評でした。ガイド・スタッフによる商人街の解説も、安土城天守跡登山も、ヴォーリズ建築群巡りでも、ガイドの説明があると/ないとの違いも、はっきりと理解できたのではないかと思います。塾の中盤まで、実地研修はとても寒かったのですが、いい塾を用意できたように思います。受講生の何人が、われわれの仲間に加わっていただくか、まだ分かりませんが、こうした観光塾を毎年つづける意味は十分にある、と確信しました！

講師の皆様、ありがとうございました。

研修部部長 山本 潔

## 三重県方面日帰り研修旅行に参加して

広報宣伝部 中村 保

令和7年12月9日(火)観光バスで参加者29名三重県いなべ市・桑名市・亀山市関町を巡り、先ずはいなべ市へ、大正3年から開業の軽便鉄道の博物館にて見学。軽便鉄道は昔、藤原岳の石灰岩(セメント)を運搬にも利用されていました。小型で可愛い軽便鉄道に阿下喜駅から大泉駅まで2駅、実際に乗ってみることが出来ました。この様子を伊勢新聞に「滋賀県の近江八幡観光ボランティアガイド協会の皆様が9日、研修で三重県を訪問しました。ミニ電車に乗車して、仲間に手を振り、童心に返った」と写真付きで掲載されました。昼食はザ・フナツヤにて鯛しゃぶしゃぶと八寸御膳で豪華で大変美味しかったです。

午後から山林王と呼ばれた桑名市の実業家二代目諸戸清六邸宅へ、イギリスの建築家コンドル氏の設計で六華苑(和洋折衷)も素晴らしかった。特に4階建ての塔屋が印象的で、塔屋の曲面ガラス他ベランダとサンルームのデザインも印象的でした。コンドル氏は、東京のニコライ堂や鹿鳴館の設計でも知られています。

次の関宿は亀山市関町にあり、東海道53次江戸から数えて47番目の宿場町として、東西追分の間1.8kmで古い町屋200軒あまり残って昭和59年国の重要伝統的建造物保存地区に選定されました。時間の関係で約1.0kmの中町の街並みを見学致しました。関宿の町家は間口が狭く奥行きが長い建物でした。

(京都の町家みたいにうなぎの寝床・電信柱も無い)街並みは近江八幡の新町通り近江商人屋敷のようにスッキリしていました。それぞれの地域でボランティアガイド方の案内があり、大変わかりやすく、ご丁寧な説明をしていただきました。

研修部の皆様・準備をしていただきました皆様方、大変お世話になりました。



## 八幡堀の散策 第4弾



2月4日、広報部主催の前川さんによる「八幡堀を散策しませんか？」第4弾が白雲館で実施されました。参加者は21名でした。まず、余談でガイドをするときの「滑舌」トレーニングとして歌舞伎18番「外郎売り(ウイロウウリ)」による早口言葉の練習を紹介されました。次に「時代劇のまち 近江八幡」ということで年代別に ①大岡越前、長谷川平蔵、遠山金四郎、水戸黄門の活躍時期と八幡商人の活躍時期についてと、②八幡町を治めた領主について話をされました。続いて白雲館の外へ出て、普段あまり案内をしていない多賀町、大工町、鉄砲町などを案内していただきました。今回も新しい知識情報が満載の散策でした。本当に前川さんありがとうございました。感謝!

広報部 堀場康治

### 知っ得コーナー

### 「伴庄右衛門家と井原西鶴」

平松清廣

伴庄右衛門家は、東隣りにあった伴伝兵衛家より慶安3年(1650年)に独立をして、新町3丁目の現在の地に本宅を構えました。屋号を「扇屋」として地子<sup>じし</sup>一<sup>いち</sup>を使用。主に、近江蚊帳・近江表・近江上布などを商っていました。

一方、大阪に江戸時代を代表する文人(浮世絵草子・人形浄瑠璃の作者、俳諧師)がいました。

好色一代男、好色一代女、日本永代蔵、世間胸算用などの代表作があります。この井原西鶴の死後にまとめられた「西鶴織留」(元禄7年/1694年刊)の中に、当時繁栄されていた様子が描かれています。



(原文)そもそも近江蚊帳の出所は、八幡の町より仕出して、是諸国に広まれり。

中にも扇屋という人・・・毎日蚊帳縫女八十余、乳・縁付ける女五十人、大広敷きにならびたるは、さながら是によごの嶋のごとし。

(訳文)そもそも近江蚊帳の発祥地は八幡の町で、ここで作り出されて諸国に広まったのである。

その中でも扇屋という人は・・・毎日蚊帳を縫う女が八十人余り、乳や縁をつける女が五十人、それが広い板の間に並んだ有様は、まるで女護の島のようなものである。

※女護の島：女性だけが住んでいる伝説上の島で男性が足を踏み入れると帰ることが出来ない。

「扇屋」という屋号は、伴庄兵衛家・伴伝兵衛家(庄兵衛の長男、後に新屋を設ける)・伴庄右衛門家(庄兵衛の次男)の三家が使っていたので、どの伴家か分かりませんが、いずれにしろ江戸中期という時期にこれほどたくさんの人を使って蚊帳を製造していたことに凄さを感じます。

現在ある旧伴家住宅は文政10年(1827年)から天保11年(1840年)に新築されたものですから、西鶴織留に描かれた時代とは異なりますが、2階では幅3間・奥行7間半の内部に1本の柱もない大空間の座敷となっているのは同様の使い方をしていたと言っても良いのではないのでしょうか。

実はこの文章に続いて西鶴は次のようなことを綴っています。

(原文)されども其程の中に、都めきたる娘はひとりもなかりけり。

(訳文)しかしこれほど多い女の中に、都めいた娘は一人もいなかった。

(意訳)しかしこんなに多い女性の中に、京の都にいるような垢ぬけた娘は一人も見当たらなかった。

※西鶴は全く余計なことを書いたものです。どこまでお客様に話すかは皆さんの良識にお任せします。